The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	幼児のセクシュアリティと自体愛-フロイトの幼児期セクシュアリティ論に関する歴史的一考察-
Author(s)	渋谷, 亮
Citation	大阪大学教育学年報. 2008, 13, p. 3-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9050
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報　第13号
Annals of Educational Studies Vol. 13

幼児のセクシュアリティと自体愛
—フロイトの幼児期セクシュアリティ論に関する歴史的一考察—

渋谷　亮

【要旨】

S・フロイトは20世紀の初頭、幼児あるいは子どものセクシュアリティを検討する理論的試みに着手した。フロイトのこうした試みを歴史的文脈においてどのように位置づけることができるのだろうか。しばしばフロイトは幼児のセクシュアリティの発見者であり、それ以前の抑圧と無視から子どものセクシュアリティを解放したと言われる。あるいはまたフロイトは幼児のセクシュアリティを解放したのではなく、その周りにより狡猾な抑圧的装置を張り巡らしたのだと言われることもある。だが重要なのは抑圧か解放かという問いではなく、フロイトのセクシュアリティ論と多様な管理形態との関係を読み解き、その変化を分析することではないだろうか。本論ではフロイトの幼児のセクシュアリティに関する理論と19世紀後半の性科学における言説との関係を正常性という観点から分析する。さらにそのなかでフロイトの独自性を明らかにしていく。

1　はじめに～フロイトの幼児期セクシュアリティ論～

S.フロイトは1905年に出版された『性理論についての三論文』(以下『性理論三論文』)の第2論文「幼児期セクシュアリティ（Die infantile Sexualität)」の冒頭において次のように述べている。

「性欲動は幼少年期には存在せず、思春期と呼ばれる人生の一時期になってはじめて目覚める、というのが性欲動についての通俗的な考えである。しかしこれは明白な誤りであるだけでなく、重大な結果をまねきかねない誤りである」(SA. 5., S. 81；『エロス論集』89頁)。

この一文は幼児期セクシュアリティを問題として提起し、科学の対象として打ち立てようとするフロイトの宣言として読むことができる。幼児期セクシュアリティの問題は精神分析の核心をなしている。自体愛、多形倒錯、性的体制の発達段階、エディプスコンプレックスなど、これらは全て幼児期セクシュアリティを探究することによって見出された概念であり、精神分析理論の独創性を示すものだ。では、そもそもフロイトにとって幼児期セクシュアリティとはどのようなものだったのだろうか。

フロイトは幼児期セクシュアリティを、忘却されにもかかわらず決して消え去ることのない先史として、多形倒錯的で自体愛的な先史として把握していた。フロイトは幼児の性生活の特徴として、「本質的に自体愛的である（対象を自分の身体に見いだす）こと」、「個々の部分欲動は全体的に相互に関連なく独立して快感を獲得しようと努力すること」、を挙げている(SA. 5., S. 103；『エロス論集』129頁)。このような幼児の性生活は成人のそれとは根本的に異質であると言える。この点は『精神分析入門』(1916－1917)において強調されている。フロイトによれば成人のセクシュアリティは、正常なものであれ倒錯したものであれ、組織性と集中性を持つ。これに対して幼児のセクシュアリティにはそれらが欠けているのである(SA. 1., S. 318－319；『精神分析入門下』12－13頁)。

フロイトによれば成人の正常な性生活は発達の結果、形成される。フロイトは幼児のセクシュアリティから成人のセクシュアリティへと至る過程を、性的体制ないしリビドーの発達段階論として描き出している。幼児の性生活は口唇期、肛門期を経て、通常は性器を中心に組織され、集中性を獲得していく。多形的で限定されないセクシュアリティが、文化的規範に従うことで限定されたセクシュアリティへと縮減され、これによって組織性を獲得するのである。

しかし、フロイトの理論体系において幼児のセクシュアリティが組織されていくこの過程は決して単純なものではなく、退行や固着を含んだ複雑な過程として記述される。幼児期の性生活の名残りは、完全には消し去ることができず、性生活は本質的には幼児的なままにとどまるのである。その意味でフロイトは

幼児のセクシュアリティを問題にしたと同時に「セクシュアリティの幼児性」をも問題にしたとも言える。

このようにフロイトは大人とは異なる幼児の性生活の多形性とその豊かさを示すと同時に、絶えざる進歩や発展という歴史観とは異なる歴史観に基づいた発達理論を展開したと言える。たしかに私たちはこのようなフロイトの幼児期セクシュアリティ論を評価し、そこから様々な含意を引き出すこともできるだろう。とはいえここで目指すのは別のことである。むしろ私たちが目指すのはフロイトの幼児期セクシュアリティ論の位置づけをセクシュアリティと発達に関する科学の成立という観点から把握しなおすことである。

私たちはしばしば進歩や発展という発達理論の枠組みにとらわれ、そこから抜け出そうとする。こうした観点からすればフロイトの幼児期セクシュアリティ論は画期的なもののように見える。だが早計にフロイトの独自性を主張する前に、精神分析の成立が児童心理学や性科学が輪郭を整えていったのと同時期であるということを考慮する必要がある。おそらくフロイトの試みはセクシュアリティと発達が科学的営みのうちに記入され、そしてまた「幼児性」が科学のうちに登録された日付を示しているのである。それゆえまたその試みはセクシュアリティと幼児性を発達論的枠組みにそって分析しようとする科学的な言説群のうちに位置づけることができるだろう。

したがって重要なのは、幼児および子どものセクシュアリティが19世紀後半から20世紀の前半にかけてどのように論じられ、そのなかでフロイトの議論がどのような位置を占めるのかという問いである。このような問いに答えた上で、はじめてフロイトの幼児期セクシュアリティ論における独自性を検討することもできるだろう。おそらくフロイトの独自性は幼児期セクシュアリティの倒錯性および多形性を強調したという点に存するのでも、あるいは常に残存する幼児期を強調した点に存するのでもない。むしろそれはフロイトのテクストにおける両義性のうちに探し求められるべきであろう。すなわちフロイトのテクストは、一方でセクシュアリティを発達論的枠組みにそって描き出すと同時に、他方でこうした枠組みを混乱させているように見える。フロイトのテクストにおける矛盾や否認は発達論的枠組みに還元することできない動きを兆候的に示しているように思えるのである。

私たちが目指すのはフロイトの幼児期セクシュアリティという問題構成をセクシュアリティと発達についての科学の成立という歴史的コンテクストに置きなおした上で、こうしたコンテクストに還元することのできないフロイトのテクストにおける両義性を読み解くことである。以下ではまずフロイトがどのように幼児期セクシュアリティを見出すに至ったのかを検討しよう。

2 幼児期セクシュアリティの発見[i]

フロイトは1890年代の半ばにはすでに神経症の発症のメカニズムにおいて幼児期の性的体験が占める重要性を強調していた。1896年の論文「ヒステリーの病因について」では「幼児期には微かな性的興奮が欠けているわけではなく、おそらく後の性的発達は幼児期の諸体験によって決定的な仕方で影響される」(SA. 4., S. 63;『著作集10』16頁)と述べている。だがこの論文において検討されるのは幼児期セクシュアリティというよりも、主として性的外傷体験であった。この時期のフロイトは現実に生じた幼児期の性的外傷体験によってヒステリーと強迫神経症が生じると考えていたのである(いわゆる「誘惑説」)。そこでは幼児の欲望それ自身の発達過程における展開が全面的に問題とされることはなかった。

一般にフロイトが幼児期セクシュアリティを評価するようになるのは父の死をきっかけに始められた自己分析によってであるとされている。こうした見解を最初に提示したのはE.クリスであろう。彼はフロイトが1890年代に盟友W.フリースに宛てた手紙を編集した際、その著名な序文において「フロイトの自己分析の最初の、そしておそらく最も重要な成果は疑いなく、誘惑病因論から幼児性欲の意義への完全な洞察へ一歩踏み出したことであった」(クリス 2001、525頁)としている。クリスによればフロイトは自己分析を通じて自らの幼少期における性的体験を想起し、そこに性的外傷体験ではなく、父を殺し母を愛したいという欲望を見出したのである。1897年10月、フリースに宛てた手紙においてフロイトはエディプス神話に言及しながら、普遍的な幼少期の欲望について語っている(『手紙』、284頁)。こうして初期の見解である「誘惑説」から幼児期セクシュアリティ論へと向けての一歩が踏み出される[ii]。

とはいえクリスが強調するのとは異なって、フロイトの幼児期セクシュアリティ論は決して単に自己分析のみによって可能になったのではない。代表的なフロイト研究はいずれもこの理論が当時の言説群と密接な関わりを持っていたことを指摘している（エレンベルガー 1980、ゲイ 1997、Kern 1973、Sulloway 1979）。フロイトが幼児の性生活について考察を始めた時、その土壌は既に整っていたのだとすら言えるだろう。

19世紀末のウィーンでは退廃的な文学が流行し、G.クリムトの『学部の絵』が性的な露骨さのために論争を引き起こしていた。このような性をめぐる世紀末の情景の背景には、19世紀後半にひとつの学としての独立性と輪郭を獲得していった性科学の存在がある。すでに1870年代頃から精神医学者たちは、司法行政や教会の権威に抵抗し、性的逸脱を犯罪や道徳の欠如と結びつける見解に反対し、これを脳と神経システムに起因する病理現象として把握しようとしていた。観察と分類に基づく方法論、および身体の内部に精神現象を還元しようとするまなざしによって精神医学は性的なものという広大な領域を自らの内部に組み込もうとしていたのである（Oosterheis 2000, pp. 43－55）。1886年に初版が出版されたR.v.クラフト＝エビングの『性的精神病理（Psychopathia Sexualis）』は性的なものの科学的分析という試みの方向性を決定づけ、性科学への道を開いたと言える。クラフト＝エビングの著作を端緒として、H.H.エリス、M.ヒルシュフェルト、A.モル、S.ベルら、多数の科学者が欲望の法則の定式化へと向けて努力を開始していた。フロイトはこうした時代の空気のなかで幼児期セクシュアリティに関する一連の概念と理論を展開していったのだ。

それではフロイトの幼児期セクシュアリティ論はこのような歴史的文脈のなかでどのように位置づけることができるのだろうか[iii]。

S.カーンはしばしばフロイトに帰せられる議論の多くがすでにフロイト以前になされていたことを明らかにしている。カーンによれば、H.モダスレーはすでに1867年に幼少期における性的衝動の発現を認めており（Kern 1973, p. 118）、19世紀末にはM.デソワール、J.ダルマーニュらが思春期前の子どものセクシュアリティを一般的で「正常なもの」とみなしていた（ibid., pp. 118－123）。それゆえカーンは、フロイトの功績が幼児期セクシュアリティを発見したという点にあるのではなく、これまで断片的に探究されてきた「子どもの性生活の諸要素」を「完全な発達論的図式において統合した」という点にあると主張している（ibid., p. 137）。当時、性科学のみならず、医学、精神医学、人類学において子どもの性に関する議論はすでに行われており、フロイトは多様な資料を辿りながら自らの論を展開することができたのだと言える。

またF.J.サロウェイは、C.ダーウィンの進化論、ならびに「個体発生は系統発生を繰り返す」というE.ヘッケルの反復発生説の広範囲に及ぶ影響のなかにフロイトの幼児期セクシュアリティ論を位置づけ、フロイトと同時代の性に関する言説群に明瞭な見取り図を与えている[iv]。サロウェイによればフロイトの盟友であったフリースは生物学的かつ進化論的視点から性を考察している。またフロイトがしばしばその著作を引用しているエリスやモルらも進化論的仮説に準拠しながら、個人の発達に重点をおいて性科学を組織しようとしていた。フロイトは彼らとともに系統発生にもとづいて個体発生を考察することによってセクシュアリティにおける発達の理論を展開したのである（Sulloway 1979、特にp. 318）。

はじめて心的装置のメカニズムを体系的に記述しようとした『草稿』（1895）において、フロイトはすでに「生物学的説明」に依拠していた。しかし発生学的なアプローチにそって幼児期の性的発達に関する議論が展開されるのはおそらく1897年以後であろう。フロイトがフリースに宛てた手紙を読んでいくと、空想に関する考察を経た後、生物学に依拠した発達論的な説明がなされるようになっていったことがわかる（下司 2006、1部2章を参照）。最終的には、反復発生説を介して、幼児期が人類の先史あるいは太古の生物と重ねあわされ、幼児の性生活とその発達が進化の過程、あるいは人類の発展の過程と重ねあわされていくことになる。

ここで必要なのはフロイトの「発達論的かつ進化論的生物学」（ibid., p. 20）に基づいたアプローチが歴史的コンテクストのなかでどのような意味をもっていたのかを問うことである。この点に関してサロウェイは当時の変質論との関係を示唆している。上山安敏もまたサロウェイの議論を踏まえた上で、フロイトの発達の理論を変質論との関係において整理している。上山によれば、フロイトは遺伝を強調する変質論に

「挑戦」することによって幼児期セクシュアリティ論を展開したとされる（上山 1989、109－134頁）。では変質論とはどのようなもので、フロイトの議論はこれとどのような関係を持っていたのだろうか。以下ではまず子どものセクシュアリティが近代においてどのように扱われてきたのかを変質論を中心に検討しよう[v]。この作業によってフロイトの幼児期セクシュアリティ論が当時の科学的言説のなかで占めていた位置も明確になるだろう。

3 近代における子どものセクシュアリティ

フロイトの時代にいたるまで、幼児あるいは子どものセクシュアリティについて語られることがなかったというわけではもちろんない。18世紀以降、セクシュアリティに対する糾弾は激しさを増し、数多くの医師、教育者、聖職者が子どもの性を厳密に取り締る技術を発展させていった。こうした糾弾はM.フーコーの言うように絶え間ない言説化あるいは権力による身体の包囲として把握できるだろう。フーコーによれば「子供と思春期の少年の性は、18世紀以来、重要な賭金＝目的となったのであり、それをめぐって無数の制度的装置と言説の戦略とが張り巡らされることとなった」（フーコー 1986、40頁）のである。それまで漠然と禁止されていた生殖に反する種々の性的活動が、18世紀以来、細分化され、詳細な分析の対象となる。それにともなって子どものセクシュアリティもまた問いの対象となり、監視され、分類され、同時に絶えず触発され、可視化される、そうした対象となるのである。

子どものセクシュアリティが問題化されたのはとりわけマスターベーション撲滅得運動においてであった。マスターベーション撲滅運動の歴史研究[vi]によれば、これまで主として宗教的・道徳的観点から断罪されてきたマスターベーションは、18世紀後半以降、医学的観点から肉体と精神のあらゆる病を引き起こす源とされ、しばしば死とすら結びつく危険なものとされた。18世紀後半、リスペクタビリティ（市民的道徳）という新たな価値が創出され（モッセ 1996）、住民の健康を第一とする公衆衛生が徐々に浸透していった（白水 2004）。この過程でかつて宗教的・道徳的な観点からのみ問題とされていたマスターベーションと子どものセクシュアリティは身体と衛生に関わる問題、つまり道徳的であるだけでなく医学的かつ教育的な問題となり、医師、教育者、家族が協力してこれと戦うべきとされたのである。このようにして子どものセクシュアリティ、性本能は、反自然的なものとして管理の対象であると同時に個々人の身体を管理するための拠点となり、医師たちと家庭とを結びつける媒介の役割を担うようになったと言える（フーコー 2002、263－283頁）。

19世紀後半には、子どものセクシュアリティはマスターベーション撲滅運動を介して精神医学、性心理学に導入され、種々の性的逸脱と結びつけられていった（同上305－318頁）。フロイトが幼児の性という問題に着手した頃には、マスターベーションを含む子ども時代の自発的な性的活動はしばしばヒステリーやその他の精神疾患の原因とされるか（Cater 1983）、あるいは変質の徴候とみなされるようになっていた。つまり子どものセクシュアリティは、性的逸脱や精神疾患を分析し説明するための解読格子であったと言える。それゆえフロイトが幼少期の性を神経症の謎を解く鍵と見なしたことも特段驚くべきことではないかもしれない。

とりわけ19世紀末には子どものセクシュアリティおよび性倒錯は変質論の文脈で論じられた。この点に関してフーコーは「〈倒錯 - 遺伝 - 病的変質〉という組み合わせ」を「性についての新しいテクノロジーの確固たる中核」として把握し、「危険であり危険にさらされている子供の監督も、長いあいだ〈病的変質〉を軸に、遺伝と倒錯のシステムを軸にして機能した」（フーコー 1986、151頁）と指摘している。

変質という概念は19世紀後半、ダーウィニズムの影響下にあった言説群と合流し、多様な領域へと浸透し、19世紀末には精神医学を席巻していた。精神医学における変質論の端緒となったのは1857年に出版されたB.A.モレルの著作である。モレルにとって変質とは遺伝によって生じる人類の「原初型」ないしは「正常型」からの病的な逸脱を、そしてまた神が創造した本来あるべき姿からの逸脱を意味していた。ラマルクの獲得形質の遺伝説によりながら、モレルは心身の疲弊が遺伝的に次世代へと伝わり精神疾患の要因になると主張し、この過程を変質として把握した。さらにV.マニャンはモレルの議論から神学的要素を拭いさり、これをダーウィン進化論と接続することで科学的な体裁を整え、精神医学への変質論の導入を

決定的にしたのである（大東 2003、129－137頁、宮崎 2004、116－120頁）。

変質論は19世紀後半に多様な意味内容を持ったものとして展開されるが、ここではその三つの含意を取り出してみよう。

第一に変質論は精神疾患の遺伝に基づいた説明原理を提供するものであった。精神疾患の器質的座を身体のうちに特定することのできなかった精神医学に対して、変質論は一種の遺伝的身体というべきものを提供したのである。このような遺伝的身体によって、均質な社会構成員の内部において社会的な脅威となりうる遺伝的に汚染された種族（家系）を区別することが可能になった。その結果、変質論は社会的に危険で「異常」な種族と「正常」な種族とを分割するための基盤となり、社会構成員のなかに種々の逸脱者、変質者を創出することを可能にしたのである。これによって精神医学は単に治療を担当するだけでなく、社会の防衛と衛生の維持という機能をも担うようになったと言える。

第二に変質論は精神疾患や種々の逸脱を、人類の原始的な段階への退行あるいは先祖がえりとして説明することによって「正常」と「異常」を関係づける働きもした。すなわち変質論において「異常」な種族＝家系は「正常」な者のかつての姿であるとされたのであり、こうして変質論は進歩と「正常性」、原始的なものと「異常性」を結びつけ、「正常なもの」と「異常なもの」の間に一種の連続性と序列を設定したのである。「異常」とは単に病理的であるというより、原始的なものであり、本能のむきだしの発現であった。ここには原始的あるいは幼児的なものの残存というフロイト的テーマを見出すことができる。

私達の文脈においてもっとも重要なことだが、第三に、変質論は性的逸脱、性倒錯を医学的に説明するための基礎をも提供した。変質とは原始的な本能の発現であり、性的逸脱はその典型であったと言えるだろう。マニャンは同性愛を変質徴候として把握し、性倒錯を神経システムの変質と結びつけている。後の性科学に大きな影響を与えたクラフト＝エビングもマニャンの見解にしたがっている（エリス 1995、73頁、Oosterheis 2000, p. 53）。それまでマスターベーションや生育環境などに原因があるとされていた性倒錯を精神医学が自らの領域に組み込み、先天的なものとして規定しようとしたときに、変質論がそのための土台を提供したと言えるのかもしれない。ここにおいて生殖と結びつかない種々の性行為が、フェティシズム、同性愛、サディスムをはじめとした多種多様な性倒錯として定式化され、これらが変質という大きなカテゴリーの中で把握されたのである。

変質論において、幼少期におけるセクシュアリティの発現はそれ自体が倒錯であり、変質の徴候であったと言える。サロウェイによれば「子ども時代の早期における性的衝動の自発的な発現は神経精神病的変質の典型的な徴候であるとされていた」（Sulloway 1979, p. 289）とされる。例えばクラフト＝エビングは—終始一貫してというわけではないが—性倒錯を変質と結びつけており、幼少期のセクシュアリティの発現を変質の徴候と見なしていた。変質者＝性倒錯者は「性欲が異常に早くからあり、すでに子どものときから発現し、自慰にはしる。あるいは性欲が全く倒錯している、つまり、その充足の仕方が種の保存に定位していない」（Krafft-Ebing “Lehrbuch der Psychiatrie”, S. 422、市野川 1996a、222頁より引用）のである。

変質論は社会構成員を分割し、その内部に一連の変質者、そして性倒錯者を創出すると同時に、これを原始的なもの、「異常なもの」として規定した。マスターベーション撲滅運動を介して問題化された子どものセクシュアリティ、性本能もまた、生殖と結びつかない数々と性倒錯と並んで、変質の徴候として把握され「異常なもの」のひとつとなったのである。抗しがたい本能、原始的な性本能の残存、さらに子どものセクシュアリティ、これら全てを私たちはフロイトの幼児期セクシュアリティ論のなかに再び見出すことができる。その限りではフロイトは、変質論から数々のテーマを引き継いだと考えることができるだろう。だがフロイトはこれらのテーマを別の仕方で機能させたのである。以下ではフロイトの幼児期セクシュアリティ論を変質理論との関係において検討しよう。

4　発達理論と「正常性」

19世紀末において大きな流れとなっていた変質論に対して、フロイトは否定的な反応を示している。『性理論三論文』の第１論文の冒頭でフロイトは先天的であることと変質とを区別したうえで、変質概念は性対象倒錯者全般に対しては適用できないと主張している（SA. 5., S. 50；『エロス論集』31－32頁）。さらに

第2論文、第1節の注ではS.ベルの名前をあげたうえで、たとえ幼児の性生活が言及されていたとしてもそれは「変質現象との関連においてのみ、そして変質の兆候としてのみ注意されているにすぎない」(ibid., S. 82；同上90頁)と述べ、変質論の限界を指摘している[vii]。実際フロイトの神経症と性倒錯に関する説明は、以下に示すように、性的外傷体験の意義を強調していた時期においても、セクシュアリティの発生学的説明に重点を移動させてからも、一貫して変質論的な説明と異なるものであった。

初期の「誘惑説」は、遺伝を重視する変質論とは異なり、後天的に与えられた性的外傷体験の重要性を強調し、遺伝の問題を家庭環境の問題（誘惑）によって置きかえようとする試みであった。フロイトはフリース宛の手紙で「遺伝はますます父親による誘惑として先鋭化します」(『手紙』216頁）と書いている。すでにみたようにフロイトは1897年頃に、性的外傷体験による説明から発生学的説明へと重心を移動させる。確かにこれにともなって遺伝が重視されるようになる。『性理論三論文』と同時期の短い論考でフロイトは当時の理論的変遷を振り返り、「体質的、遺伝的要因を否定することなしに、性に疾病の要因における主役の座を与えようとした」(SA. 5., S. 153；『著作集10』104頁）と述べている。とはいえフロイトは単に遺伝決定論を主張したのではなかった。フロイトの『性理論三論文』は遺伝的要因を否定することなしに変質論とは異なる解決を提示するものとして読むことができる。

『性理論三論文』においてフロイトは遺伝的要因と素質的要因が協同して働くということを主張している。だがより重要なのは、フロイトが幼児における性的発現ないし性倒錯を変質徴候としてではなく、人間の原初的な素質として把握することによって変質論から離れていくということである。すなわち「性的（対象）倒錯の素質は、人間の性欲動の原初的で普遍的な素質であり、そこから正常な性行動が成熟過程において器官の変化と心的な制止の結果として発達してくると言える。我々はこの原初的素質が子ども時代において示されると考えた」(ibid., S. 134；同上182頁)。

フロイトによれば幼児の性生活はすべからく倒錯的であり、これが発達によって異性愛的なものになる。それゆえ「正常」なのか「異常」なのかは、発達の過程において決定されるのである。「性生活のあらゆる病的な障害は、発達の制止と考えるべき」(ibid., S. 113；同上146頁)なのである。このようにしてフロイトは変質論に代えて、幼児期における倒錯の普遍性とセクシュアリティにおける発達という考えを提示したのだと言える。

とはいえサロウェイによればこれらの考えはフロイト独自のものではなく、当時の性科学においてすでに展開されていた。例えばドイツの心理学者であり哲学者でもあったM.デソワールは1894年に進化論的な観点から性的発達における二つの主要な段階を区別していた。デソワールによれば思春期前のリビドーの衝動は「未分化」であり、その性的対象は定まったものではない（動物すらも性対象になりえる）。次にリビドーの分化された段階が訪れる。この段階において初めて異性愛的な性的関係が性衝動の目的となり、それ以外の性対象へと向かう衝動は抑圧されるのである(Sulloway 1979, p. 298)。この考えは生化学者A.モルへと引き継がれていく。またイギリスの性科学者H.H.エリスも同様に子どもの性欲は未分化で定まったものではないと主張している。エリスによれば「幼年期・少年期・思春期前期に現れる性本能は未分化である。最初、性本能は漠然とした性目的に向けられるばかりではなく、その対象も性別もしばしば不明確である」(エリス 1995、79頁)とされる。ここに見られる未分化な性本能という考えはフロイトの両性性や多形倒錯の概念に対応すると理解してよいだろう。

デソワール、エリスらは思春期前の未分化な性本能と思春期以後の分化した性本能を、性本能の発達という観点から統一的に捉え、倒錯的な子どものセクシュアリティを「正常な」過程として位置づけたのだと言える。サロウェイによればこうした発達理論の背景にはダーウィン進化論の影響がある。ダーウィン進化論がもたらした洞察の一つは「ある段階において自然なことが、以前の段階でも自然であるとは限らないということ」(Sulloway 1979, p. 318)であった。このような洞察が発達の過程に応用され、倒錯的な幼少期の性生活が見出されたのである。この意味でフロイトは、時代の流れのなかで、幼児期と原始時代を重ね合わせ、幼児の性生活を探求したのだと言える。

サロウェイはこれら一連の発達理論が変質論に取ってかわたったことを示唆して、自らの著作の一説に「変質論の消失」というタイトルをつけている。上山もまたサロウェイの見解を踏まえ、フロイトの幼児期セクシュアリティ論を変質論の乗り越えとして把握している。とはいえフロイトおよび同時代の性科学

が提示した性的発達の理論を単に変質論の乗り越えとして把握するだけでは不十分であるように思われる。変質論は社会構成員を種々の倒錯者＝「異常者」を分割し、これを関係づける働きを持つものであった。しかしフロイトと同時代の性科学における系統発生に準拠した発達理論もまた、変質論とは異なる仕方で社会構成員を種々の倒錯者＝「異常者」に分割し、これを序列化するものであったと言えるのではないだろうか。

変質論において、性的逸脱はしばしば、人類の原始の姿への退化であり、本能の剥き出しの発現と見なされていた。そこでは人類の進化、発展が「正常」と「異常」を区別する基準であった。すなわち進化していないものが「異常」を意味するのである。これに対してフロイトが提示した系統発生に基づく発達の理論は、人類の原始時代を個人の幼児期と重ねあわせることによって、幼児期の性倒錯を「正常」な発達過程に位置づけるものであった。とはいえこのことは「異常」と「正常」の区分が破棄されたということを意味するのではない。むしろ、フロイトおよび性科学が提示したこうした理論は「正常性（Normality）」概念の変化というより大きなコンテクストのなかで位置づけるべきであろう。

Ｉ.ハッキングによれば19世紀前半以来、Ａ.コントやＥ.デュルケームによって「正常なもの」と「病理的なもの」ないしは「異常なもの」は質的には異ならず、連続的に把握されるべきであるという考えが浸透していった。例えば、デュルケームにおいて犯罪それ自体は「異常なもの」でも、「正常なもの」でもなく、犯罪の「異常性」は、社会におけるその発生率の平均から判断されるべきものとなる（ハッキング 1999、240頁－260頁）。フロイトの議論においても同様に倒錯それ自体は「正常」でも「異常」でもありえない。「正常」か「異常」かを決定するのは発達のどの時点でそれが現れるかである。これによって、進化の過程を基準に性倒錯それ自体を原始的かつ「異常なもの」とするのとは異なる、新たな「正常性」と「異常性」の区分が創出され、発達過程を基準にした「正常性」の精緻な分析が可能になるのである。

したがってフロイトおよび性科学が提示する系統発生にもとづいた発達理論は「子ども＝原始人」という定式を根拠に「異常性」を発達停止として系統発生的に説明し、これによって多種多様な逸脱を「異常なもの＝幼児的なもの」として科学的記述のうちに書き込む技術だったと言える。性衝動の未分化な段階から分化した段階へという発達過程はそのために必要な理論的仮説として機能したのである。こうして幼児期から発して、性本能の発達を辿り、これによって病理的というより、本能の逸脱であるところの「異常性」を分析することが可能になる。確かにフロイトは幼児期セクシュアリティの倒錯性を問題にすることによって、変質論における家族の変質や一族の変質という概念から遠ざかったと言える。しかし彼は変質を発達停止という発達論的かつ個人的概念に翻案したと考えることもできる。その意味では、Ｌ.バーキンの著作『性科学の誕生』で指摘されているように、フロイトらの系統発生にもとづいた発達論もまた変質論の一形態に過ぎないとみなすことができるのである（バーキン 1997、147頁）。

これまで見てきたようにフロイトの幼児期セクシュアリティ論は、原始的なものの残存というテーマを変質論と共有しており、早期におけるセクシュアリティの倒錯性と多形性というテーマを同時期の性科学と共有している。フロイトおよび同時代の性科学は、これらのテーマを系統発生に基づいた発達という観点から機能させることによって、セクシュアリティを分析しようとしたのであり、それは「正常性」をより精緻に分析する理論体系の一つとして把握することができるだろう。

とはいえフロイトのテクストは系統発生的な発達理論のうちに還元することのできない読みの可能性を残している。ここで参照したいのがＬ.ベルサーニである。ベルサーニは『フロイト的身体』においてフロイトの性理論が「性的快感の、一貫性を欠如した前 - 歴史的で非 - 物語的な性質」とこれに覆い被さる発達の理論との間で引き裂かれていることを指摘している。ベルサーニが示唆するように、フロイトのテクストにおいて発達論的枠組みの傍らにほとんど目につかない形で、これを混乱させ、私たちの性的主体性を動揺させる動きを見いだすことができる。こうした動きはとりわけ性感帯と自体愛とに関する記述において顕著なものとなる。私たちは以下でまずフロイトの自体愛と性感帯に関する議論を確認していく。次にベルサーニの議論を参照しながら発達の理論に反するかに見える自体愛の性質を検討しよう。これによってフロイトのテクストにおける系統発生的な発達理論に還元しえない両義性を示すことができるだろう。

5 性感帯と自体愛

フロイトにおいて性感帯という概念と自体愛という概念は密接に結びついている。両者はフロイトが幼児期セクシュアリティ論を展開するうえで欠かすことのできない概念だったと言える。まず性感帯、とりわけ幼児の性感帯という概念から確認していこう。P.アマッカーはこの概念が有機体におけるエネルギーの排出へと向かう傾向（恒常原則、快原則）という神経学的定式から生まれたものであることを指摘している（Amacher 1974, pp. 245−248)。フロイトは幼児の性感帯という概念に発生学的にアプローチすることによって幼児期セクシュアリティ論への歩みを進めていく。

1897年にフリース宛に書かれた重要な手紙を見てみよう。そこでフロイトはおそらくはじめて幼児の性感帯の発達というアイデアを展開しており、これが後の性器体制、およびリビドーの発達段階論の基礎となる。

「幼児期には性の放出はまだ後のようには局限されておらず、そのため幼児期には後に放棄される帯域も（ひょっとすると全身体表面もともに)、彼の性の放出に類似した何かをある程度まで刺激すると仮定することができます。これらの最初の性感帯の没落と対をなすものは、発達の経過の中でのある種の内部器官の退化でしょう」（『手紙』293頁)。

この手紙でフロイトは抑圧のメカニズムを幼児の性感帯の生物学的発達に基づいて論じている。フロイトによれば局限されていない幼児期の性感帯は器官の退化とともに没落する。このような没落の後、放棄されたはずの性感帯に興奮が与えられるとそれは大きな嫌悪感、不快を生じさせる（フロイトはとりわけ口腔・咽頭部と肛門部の性感帯に言及している)。こうした嫌悪感、不快によって抑圧が引き起こされるのである。

興味深いのはこのような生物学的発達論的アプローチおいても、フロイトが外傷体験に準拠しているということである。引用した文章の直後でフロイトは「誰かが子どもの生殖器を刺激していると何年かのちに事後性を介して、その記憶によって当時よりはるかに強い性の放出が起こります」(同上)と書いている。つまりフロイトによれば抑圧のきっかけとなる嫌悪感あるいは不快を引き起こすのは、幼少期において行われた他者による性感帯への刺激である。こうした刺激が、性感帯が放棄されたのちに事後的に想起され、これによって激しい不快（苦痛）が生じるのである。

このような枠組みをフロイトは『性理論三論文』以後も維持していたと言える。ただしフロイトはここで言われる「誰か」が他ならぬ幼児自身であるとみなしていく。つまり幼児は自ら性感帯を刺激し、これが後に嫌悪感を引き起こすとされるのである。このように幼児自身を「誘惑者」とみなすことで、幼児期のセクシュアリティが十分に論じられるようになる。フロイトが幼少期におけるマスターベーションにこだわるのもこの観点から理解できる。それは抑圧の条件なのである。

このようにして幼児が自らの身体に触れ、自らの性感帯を刺激する活動が重要なものとなっていった。フロイトはこれを「自体愛」として把握している。この言葉はすでに1899年のフリース宛ての手紙において用いられていた。「性の階層の最下層は自体愛です。これは精神性的目標を放棄し、局所的に満足させる感覚だけを求めます。それはついで異体愛alloerotisums（同性愛、異性愛）に取って代わられますが、確実に特別な流れとして存続します」（同上416頁)。

フロイトによれば自体愛的活動とは、自己の身体に触れ性感帯を刺激する活動であり、それは「性の階層の最下層」に位置づくセクシュアリティの原初的姿である。典型的な自体愛的活動は幼児のおしゃぶりであるとされる[viii]。それでは幼児の性的発達において自体愛はどのような位置を占めるのだろうか。

自体愛的段階とは他者から分離する段階を意味している。フロイトによれば幼児の最初の活動、すなわち「母親の乳房（あるいはその代用品）を吸引すること」において、すでに快が感じられている（(SA. 5., S. 88；『エロス論集』104頁)。しかしそこでは栄養の摂取と性的満足はいまだ結びついており、性的欲動は独立していない。「母の乳房における性対象」という最初の性対象を喪失するとともに、幼児と母とのつながりが断ち切られ、生命維持のための活動と快をえるための活動とが分離する。ここにおいて純粋に快をえるための反復的活動が、最初の純粋な性的活動として始められるのである。これが自体愛である。

つまり性欲動は性対象を放棄し、自らの身体へと向かうことで初めて独立するのであり、性欲動はその

原初において対象から離れなければならないのである（ibid., S. 126；同上168－169頁）。フロイトが『性理論三論文』および「欲動とその運命」において定式化する重要なテーゼは、性欲動が本質的には対象に依存しないというものである（ibid., S. 58；同上48頁）。性欲動はむしろ性感帯における「むず痒さ」によって生じ、性感帯を刺激することによって解消される。このような性欲動の対象からの独立性を示すのが自体愛的活動であると言える。

フロイトによれば幼児において性感帯は局限されておらず、幼児の身体はここかしこで「むず痒さ」を覚える。幼児は自体愛的にこれを刺激し、それによって緊張が解消され快が得られる。しかしこのプロセスは見かけほど自明なものではない。フロイトの記述はとりわけ性感帯に関する議論において、晦渋なものになる。以下ではL.ベルサーニの議論を参照しながら、フロイトの議論を辿っていこう。

6　セクシュアリティのマゾヒズム的性質

自体愛とは自ら性感帯を刺激することによって、対象とは無関係に快を得る活動であった。だがフロイトの性感帯に関する議論は曖昧な点を含んでいる。フロイトは幼児の欲動の性目標が「何らかの方法で選択された性感帯に適切な刺激を与えることによって、満足を得ることである」(SA. 5., S. 91；『エロス論集』108頁）と書いた後に、自らの戸惑いを表明している。「それが幾分奇異に思えるのは、第一の刺激を解消することによって、同じ場所に第二の刺激を与えることが要求されるように見えるからである」（ibid., S. 91；同上109頁）。この奇妙な印象をフロイトは「性的緊張」を論じるなかで明確にしている。

フロイトによれば緊張感には常に不快という性格が備わっており、緊張の解消こそが快である。これは1895年に書かれた『草稿』以来一貫してフロイトを導くエネルギー論的・経済論的原理（恒常原則、快原則）に基づいている。とはいえ、非性器的な性感帯へ刺激を加えることが緊張の増大をもたらすということ、それゆえにまた緊張の解消のみならず、性的なプロセスによって形成された緊張自体にも常に快がともなうということをもまたフロイトは認めざるをえない(ibid., S. 114；同上148頁)。ここには明白な齟齬があると言えるだろう。

この点に関してL.ベルサーニは、フロイトの性理論が緊張の解消による快と緊張にともなう快という二つの相容れない快に関する記述の間で引き裂かれていることに注意を促している。ベルサーニによれば、これら二つの快は決して統合しえないのであり、フロイトは増大する緊張のもたらす快を前に後ずさりしているのである。ベルサーニは、ここから緊張の増大がもたらす不快を快として感じることがセクシュアリティを規定すると主張する。フロイトにおけるセクシュアリティ、「それは、不快であることがもたらす快感、あるいはすでに不快である快感を増大させる欲望、さらにあるいはまた不快を再生産することによって刺激を解除するという衝動、そうした快感、欲望、衝動とやや神秘的な関係を取り結んでいるだろう」（ベルサーニ 1999、59頁）。それゆえまたベルサーニはセクシュアリティがマゾヒズムとほとんど同義だと述べるのである。このことは自体愛の性質の再定義を促すと言える。ベルサーニに従うならば、幼児期における自体愛的活動とは性感帯へ刺激を与え緊張を増大させる活動であり、不快を再生産し反復する活動であるということになる。ベルサーニは『救済の文化』の第2章「エロスの想定」においてこの考えをさらに展開し、フロイトの理論的な帰結として自体愛のもたらすマゾヒズム的な快は自己破砕の経験そのものを欲望するようになると主張する。

「セクシュアリティに内在的な自己中心的性質—つまりセクシュアリティにおける対象に対する、そして器官の特殊性に対する無関係性—によって、自体愛は発達し、その結果、快の源泉は、そして結果的に欲望の対象は、まさに動揺あるいは自己破砕の経験となる」（Bersani 1990, p. 37）。

自体愛的活動は、不快を再生産し、自らに苦痛と動揺を与え、自己の破砕を目指す。さらにベルサーニはこのような自己破砕へと向かう欲望において逆説的に自己の統合、自我が現れてくると主張する。なぜなら自我とはマゾヒズム的快がもたらす意識の動揺によって構成される心的全体であり、「それ自身の解体という快を予測することによって余儀なくされる一種の情動的な推測」(ibid., p. 38) だからである。つまり自らを破壊しようとする欲望において、はじめて反省が立ち上がり、自己の統合の運動が現れてくるのである。

ベルサーニが言うように、セクシュアリティがその発生においてマゾヒズム的性質を持ち、自体愛が性感帯における緊張の解放ではなく緊張の増大が快をもたらすことで自己破砕へと向かう欲望を反復する運動なのだとすれば、自体愛は発達論的枠組みと齟齬をきたすものとなるとだろう。なぜなら発達論的枠組みに反して、自体愛は苦痛と自己破砕の経験を反復するよう駆り立て、絶えず人間を無為へと追いやるからである。こうしたすべては確かにフロイトのテクストにおいて萌芽的に示されているのである。

7 自体愛と発達理論

ベルサーニの議論は、フロイトが1920年代後半以降の一連の文化論で中心的に取り扱った幼児期の「よるべなさ」という重要なモチーフに対応していると言えるだろう。すでにフロイトは1895年に書かれた『草稿』において無力な幼児（乳児）をモデルに考察をすすめており、『快原則の彼岸』（1921）においては外傷経験を論じるために有機体を単純化し「非常に強力なエネルギーで満たされた外界」を漂う小胞というモデルにしたがって議論をすすめている（SA. 3., S. 236；『自我論集』144頁）。幼児、および生ける小胞、というこれらのモデルは内側から訪れる様々な刺激、さらには外界から訪れる脅威によって脅かされたよるべなき存在である。『草稿』を見てみよう。

そこでは幼児は「身近な人間」（たいていは母）によって保護されなければならない存在として記述される。フロイトによれば「身近な人間」は幼児にとって最初の満足の対象であり、憎しみの対象であり、そしてまた唯一の援助する力である（G. W. N., S. 426；『著作集7』266頁）。それゆえ「身近な人間」がそばにいなくなるとき、幼児は内側と外側からの刺激がもたらす苦痛を甘受せざるをえず、これを避けることができない。『草稿』の根本的なテーゼは、殺到する刺激を拘束しそれを緩和する自我が苦痛の後に遅れてやってくるということであった。『草稿』の考察を引き継いだとも言える1911年の「心的現象の二原則に関する定式」では母の不在が次のように記述されている。

「乳児は増大する刺激と満足が生じないことに対する不快を、叫んだりじたばたするなどの放出運動によって示し、そしてこれによって幻覚的満足を体験する。後の幼児期になって、このような放出の表出を表現手段として意図的に使用することを学ぶ。(…) 本来ならば快原則の支配は、両親からの完全な心的分離とともに、完了するのである」（SA. 3., S. 19；『著作集6』37頁）。

ここではすでに「快原則の彼岸」に連なる構想が示されている。幼児は両親から心的に分離するその過程において苦痛を甘受せざるをえない。そこにおいて「快原則の支配」以前の、快原則に還元しえない何かが生じるのである。だとすればそれは、幼児が「身近な人間」の不在を受け入れ、苦痛を甘受し、これを快として感じることによって生き延びようとするということではないのか。L. ベルサーニが『フロイト的身体』において宣言する「マゾヒズムが生の役に立つ」（ベルサーニ 1999、64頁）という言葉はこのことを意味していると言える。それゆえに自体愛とは自らの身体に触れ、能動的に不快を得ることによってこれを快にかえるマゾヒズム的戦略であり、苦痛に満ちた他者からの分離を快として耐え忍ぶ技法であるとはいえないだろうか。

だがフロイトは多くの場合、自体愛を幻想による満足と同様に、即座に緊張を解放しようとする「快原則」の担い手と見なし、これを発達理論のなかに組み込んでいくのである。フロイトによれば、快原則に支配された自体愛的段階から他者へと欲動を向けなおし、他者との関係を回復する対象愛の段階への移行こそがあるべき発達の姿である。人は他者を愛し、自己を守るために自体愛と快原則を放棄することを学習しなければならない。そして教育こそが幼児を自体愛から引き離すという役割を担うのである。1908年の「〈文化的性道徳〉と現代人の神経過敏」では「自体愛段階を教育の力によって早く終わるように促す」べきであるとされ、「性欲動は自体愛から対象愛へ、また性感帯における自給自足主義から、性器部位への性感帯の従属へと発達していく」（SA. 9., S. 19；『著作集10』114頁）とされる。フロイトはこのように自体愛を克服していく過程と種の繁殖を目指す性器優位が確立していく過程とを重ねあわせ、教育がこのような発達を促す役割を担うとみなすのである。また1914年のシュレーバー論においては父親が自体愛を断念させる教育者として現れている。そこで問題となっているのは父による禁止（あるいはその空想）である。このような発達論的図式において自体愛は、教育による発達の促進によって乗り越えられるべき幼児

期の一段階に過ぎないとされる。

だが自体愛が快原則の担い手であるのではなく自己破砕へと向かう運動であるとすれば、教育による発達という物語は成立しえない。これまで見てきたところによれば、むしろ自体愛は教育および父の禁止に先立って、主体の根源に自己破砕を刻み込み、発達を絶えず無に帰す運動である。とはいえこのような自己破砕の経験こそは主体と自我の条件となり、そのために逆説的に発達の基礎をなすと言えるかもしれない。そこではセクシュアリティの発達過程と、発達を促すと同時に頓挫させる原初的な自体愛的運動との区別をつけることすら困難になるだろう。

フロイトは1895年に書かれた『草稿』以来、とりわけ「快原則の彼岸」(1920) および「マゾヒズムの経済論的原則」(1924) に至るまで、幾度もセクシュアリティのマゾヒズム的性質を確認しながらも、この思考を徹底して追求することはない。そして自体愛は自己破砕の経験へと至る運動としてではなく、快感原則を担う幼児期の一段階として把握されてしまう。しかし次のように考えることはできないだろうか。つまりフロイトがそもそもの初めである『草稿』以来、執拗に自己解体の快という問題を提起し、これを否認せざるをえないということそれ自体がひとつの兆候ではないのか。つまりフロイトはこのような問題を提起し、同時に絶えずこれを否定することによってのみ、発達理論の枠組みを維持しているのではないか。フロイトとともに展開された同時代のセクシュアリティと発達に関する多くのテクストの中で、フロイトのテクストは発達の条件であると同時に発達それ自体を無に帰すセクシュアリティの運動を刻み込んでいるがゆえに特異なのではないか。こうした論点はさらに展開する必要があるだろう。

8　おわりに～科学、セクシュアリティ、幼児性～

上山安敏は『神話と科学』のあとがきで「1880年代から1910年代にかけての時代は原人間、心、人間の深層知を探測した時代である。それは神話による人間の原始の観念層を発掘した時代でもある」(上山 2001、384頁)と指摘している。フロイトもまた個体発生は系統発生を繰り返すという、それ自体一つの神話である反復説のもとで、幼児期と人類の原始を重ね合わせ、健忘された原人間としての幼児期、とりわけ幼児期の性生活を見出し、これを探測した。

おそらく幼児期あるいは幼児性は19世紀末から20世紀の前半において西洋文化の地層に生じた変化を計測する上での指標となりうる。19世紀において人々のまなざしは人間の起源へと向かい、狂人、未開人、原始人の間に共通する一種の幼児性が見出された。19世紀末から20世紀前半において、精神分析、児童心理学、性科学とともに幼児性は科学的な対象として構成されていった。19世紀の人文諸科学の歩みは幼児性を科学的な対象として記入するための絶え間ない歩みとして把握することができるかもしれない。

だがフロイトの試みは両義的であるようにみえる。フロイトは一方では反復説を基礎とした発達の理論にそって、つまり私たちがいかにして自分自身となったかというアイデンティティの物語という観点から、セクシュアリティを語ろうとする。他方で、フロイトは発達の物語に還元しえない経験をもセクシュアリティの根底に見出したと言えるだろう。それは他者との結びつきへと向かうのではなく、自己の破壊を享受する他者なしの経験である。ここにおいてフロイトが半ば否認しつつ提示するのは、発達のある時点への退行ではなく、発達それ自体を覆すような自己破壊の経験の反復であり、自己が破壊のなかで自己の破壊に先だたれて生じるということである。フロイトの幼児期セクシュアリティ論のうちには、このように二つの幼児性についての考え方が存在していたと言えるかもしれない。

G.バタイユがエロティシズムのうちに自己を超出し、人間性を否定する侵犯の運動を見出した時、あるいはM.フーコーがセクシュアリティのうちに他者なしに自己を構成する諸経験の場を見出した時、彼らがフロイトとともに歩んでいなかったとはおそらく言えない。とはいえフロイトの試みは、その後の哲学的な試みのなかで把握されるだけでなく、神話と科学が混合する時代的な文脈のなかでも把握される必要があるだろう。19世紀末から20世紀前半にかけての幼児期を巡る思想の地図、一方で児童心理学、性科学などの幼児期に関する諸科学が誕生し、他方で幼児期に関する思想が生み出されたこの時代の思想の地図を、本論で検討したフロイトの両義性のもとで描き出すことができるかもしれない。

i この時期のフロイトの理論的変遷に関しては多くの研究があるが、先行を研究をまとめた上で新たな見解を提示したものとして下司 2006、1部1章、2章を参照。

ii とはいえ1905年の『性理論三論文』においても、フロイトはいまだ幼児に対する「誘惑」について語っており、後年になっても1896年の見解が決して誤ったものではないという言明が繰り返される。それゆえ「誘惑説」が放棄されたのではなく、力点が置き換えられたと考えた方が妥当だろう。

iii 本論であげたもの以外にはギルマン 1997a 381－400頁、Carter 1983、鈴木晶 1987も参照。

iv フロイトと進化論の関係についてはリトヴォ 1999も参照。

v 変質論とフロイトの関係に関しては、上山、サロウェイの議論とともに市野川容孝 1996a、市野川容孝 1996bも参照。

vi マスターベーション撲滅運動に関しては石川文康 2001、スタンジェ、ネック 2001、デュシェ 1996、を参照。また特にマスターベーション撲滅運動と教育および子どものセクシュアリティとの関係に関してはフーコー 2002、260-312頁、白水浩信 2004、188－216頁、Rosario II 1995を参照。

vii このような拒絶の背景には当時の医学言説において変質論と結びついていたユダヤ人の位置づけがあったと言える。S.L.ギルマンによれば19世紀末の医学界において、ユダヤ人は性倒錯の遺伝的素質を持つと見なされており、このことはまた種の変質と結びつけられていた（Gillman 1994, 特にp.53－55）。

viii この言葉自体はH.H.エリスから借りてこられたものだ。エリスはオートエロティシズム（自体愛）（autoerotism）を次のように規定している。「私の言う〈オートエロティシズム（自体愛）〉は、自分以外の人間から直接あるいは間接に刺激を与えられることなしに、自発的に性的情動が生じてくることである」(Ellis 1920, p. 161、邦訳225頁)。

引用参照文献一覧

フロイトの著作は邦訳を参考にしながら文脈に応じて訳しなおした。フロイトの著作に関しては主として1989 "Studienausgabe, 10 Bde", S. Fischer.（SAと表記）を用いた。その他のフロイトの著作は以下。

1987 "Gesammelte Werke, Nachtragsband, Texte aus den Jahren 1885-1938 (Gebundene Ausgabe)" S. Fischer.（G. W. Nと表記）

『フロイト著作集』人文書院（著作集と表記）1968－1984　高橋義孝, 小此木啓吾他訳

『精神分析入門（全2巻）』新潮社 1977　高橋 義孝, 下坂幸三訳

『自我論集』筑摩書房 1996　竹田青嗣編, 中山元訳

『エロス論集』筑摩書房 1997　中山元編訳

『フロイト フリースへの手紙—1887 - 1904』誠信書房（手紙と表記）マッソン, J.M.、ショーウォルター, M. 編著 2001 河田晃訳

Amacher, P. 1974 'The Concepts of the Pleasure Principle and Infantile Erogenous Zones Shaped by Frud's Neuroligical Education' "Psychoanalytic Quaterly" V. 43, pp. 218-223.

Bernfeld, S. 1944 'Freud's Earliest Theories and the School of Helmholtz' "Psychoanalytic Quaterly" V. 13, pp. 341-362

Bersani, L. 1990 "The Culture of Redemption" Harvard Univ Press.

Rosario II, V. A. 1995 'Phantastical Poluttions: the Public Threat of Private Vice in France' ed by Bennett, P. + Rosario II, V. A. "Solitary Pleasures: The Historical, Literary and Artistic Discourses of Autoeroticism" Routledge. pp. 101-130

Carter, KC. 1983 'Infantile Hysteria and Infantile Secuality in Late 19th-century German-Language Medical Literature' "Medical History" V..27-2, pp. 186-196

Ellis, H. H. 1920 "Studies in the psychology of Sex" F. A. Davis Company, Publishers =1996 佐藤春夫訳『性の心理vol 1 羞恥心の進化』未知谷

Gilman, S. L. 1994 'Sigmund Freud and the Sexologists: A Second Reading' ed by Gilman, S. L. +Birmele, J.+ Geller, J. +Greenberg, V. D. '"Reading Freud's Reading" Ney York Univ Press., pp. 47-76

Kern, S. 1973 'Freud and the Discovery of Child Sexuality' "History of Childhood Quarterly" summer, pp. 117-141

Oosterheis, H. 2000 "Stepchildren of Nature: Krafft-Ebing, Psychiatry, and the making of sexual identity" the

Univ of Chicago press.
Sulloway, F. J. 1979 "Freud, Biologist of the Mind: Beyond the Psychoanalytic Legend" Harvard Univ Press.
石川文康 2001『マスターベーションの歴史』作品社
市野川容孝 1996a「種から剥がれ落ちる性」『Imago 2 月臨時増刊号』青土社216－232頁
市野川容孝 1996b「人間科学におけるフロイトの意義—「変質」概念との関係を中心に」『明治学院論叢』(通号575),217－242頁
上山安敏 1989『フロイトとユング—精神分析運動とヨーロッパ知識社会』岩波書店
上山安敏 2001『神話と科学』岩波書店
エリス, H. H. 1995 佐藤春夫訳『性の心理vol 4 性倒錯』未知谷
エレンベルガー, H. F. 1980 木村敏、中井久夫監訳『無意識の発見—力動精神医学発達史』弘文堂
ギルマン, S. L. 1997a 大瀧啓裕訳『性の表象』青土社
ギルマン, S. L. 1997b 鈴木淑美訳『フロイト・人種・ジェンダー』青土社
クリス, E. 2001「一九五〇年の初版への序論」河田晃訳『フロイト フリースへの手紙—1887 - 1904』誠信書房505-541頁
ゲイ, P. 1997, 2004 鈴木晶訳『フロイト』全2巻 みすず書房
下司晶 2006『「精神分析的子ども」の誕生—フロイト主義と教育言説』東京大学出版会
ジョーンズ, E. 1969 マーカス, S.、ライオネル, T. 編 竹友康彦、藤井治彦訳『フロイトの生涯』紀伊国屋書店
白水浩信 2004『ポリスとしての教育—教育的統治のアルケオロジー』東京大学出版会
鈴木晶 1987「個体発生は系統発生を反復する—精神分析と反復説」鈴木, 晶『現代思想 15(7)』青土社 184-195頁
スタンジェ, J.、ネック, A. V. 2001 稲松三千野訳『自慰—抑圧と恐怖の精神史』原書房
大東祥孝 2003「〈変質〉と〈解体〉—精神医学と進化論」坂上孝編『変異するダーウィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会127－158頁
デュシェ, D-J. 1996 金塚貞文訳『オナニズムの歴史』白水社
ハッキング, I. 1999 石原英樹, 重田園江訳『偶然を飼いならす—統計学と第二次科学革命』木鐸社
バーキン, L. 1997 太田省一訳『性科学の誕生—欲望・消費・個人主義 1871 - 1914』十月社
フーコー, M. 1986 渡辺守章訳『性の歴史 1』新潮社
フーコー, M. 2002 牧改康之訳『ミッシェルフーコー講義集成 5 コレージュ・ド・フランス講義1974 - 1975年度 異常者たち』筑摩書房
ベルサーニ, L. 1999 長原豊訳『フロイト的身体』青土社
宮崎かすみ 2004「変質論とヨーロッパの内なる他者」『横浜国立大学教育人間科学部紀要. II, 人文科学 6』113－133頁
村山敏勝 2005『(見えない)欲望へ向けて—クィア批評との対話』人文書院
モッセ, G. L. 1996 佐藤卓己、佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ—市民道徳とナチズム』柏書房
リトヴォ, L. 1999 安田一郎訳『ダーウィンを読むフロイト—二つの科学の物語』青土社

Infantile Sexuality and Autoerotism
—Thought on the History of Freud's Theory of Infantile Sexuality—

SHIBUYA Ryo

In the early twentieth century, S. Freud attempted to theorize on infantile and child sexuality. What implications did this attempt have in history? It is often stated that Freud discovered infantile sexuality and liberated infantile sexuality from the previous repression. However, it is also often stated that Freud did not liberate, but repressed more wilily. But, the focus should not be on whether it is repression or liberation, instead on the manner in which Freud's theory of sexuality is related to varied forms of control techniques and the manner in which this relation changes. I would like to reexamine this relation from the perspective on normality. Through this reexamination, I would like to clarify the originality of Freud's theory of infantile sexuality.